《日本研究所　研究プロジェクト紹介》

安藤昌益を再読・再解釈する――『自然真営道』からみえる現代社会の課題

ロマン・パシュカ

「忘れられた思想家」安藤昌益（1703–1762）は、彼自身が生きた世の中について「私法世」と「自然の世」と、大きく二つに分けて論じている。「私法世」とは、支配者が作り出した「法」の下で災害、戦乱、支配者と民衆の間の力関係など、封建制度そのものが存在する現実社会のことであり、「自然の世」とは身分の差別のない、平等な、自然と共生する社会のことである。

昌益は寓話や比喩など様々な形で「私法世」を批判しながら「自然の世」を描写し、そしてその「私法世」から「自然の世」への移行の必要性を提唱し、具体的な移行の方策をも提案している。その中で、自然の体系だけではなく学問の質やあり方、言葉の意味や言語の社会的な役割、書くことの意義など、様々なテーマに触れていく。

本研究では、安藤昌益の思想の核の部分に当たる『自然真営道』を再読し、「自然の世」を描く段階で昌益が使用するキーワードを手がかりに現代社会が抱える問題や課題について再考することを目標とする。具体的に、「転定」（てんち）、「活真」（かっしん）、「直耕」（ちょっこう）、「不耕」（ふこう）、「不耕貪食」（ふこうどんしょく）、「互性」（ごせい）、「男女」（ひと）、「私法世」（しほうせい）など、昌益の「自然観」において主要となる概念やタームを明らかにした上で、現代の日本における農業のあり方、男女の平等、自然の破壊などといった現象や問題の認識・解決に向けて新たな課題を提示する。

なお、その新たな課題をどのように表現・発信し、どのように意識してもらえるかという問いにもとりかかり、『自然真営道』の再翻訳について検討し、安藤昌益の思想のアウトラインを教育の現場で取り入れる可能性についても探っていきたい。